

---

# ニィヤ と じいじ の 呑気な日常

茅野 遼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ニイヤ と じいじ の 呑気な日常

### 【Nコード】

N0641D

### 【作者名】

茅野 遼

### 【あらすじ】

シャムネコと日本猫の雑種「ニイヤ」と、年金生活をのんびり過ごしている「じいじ」の、のんびりとした日常風景のお話し。

**（前書き）**

気楽に、気楽に、お楽しみください。

ニイヤは一歳半の、ヤンチャなメス猫だ。 シャムネコと日本猫の雑種で、まだ生後2ヶ月の頃、高杉家へやって来た。 当時は、片手の上に乗ってしまう様なサイズだった。

シャムの血を濃く引いており、体全体は茶色がかったクリーム色。耳と尻尾、4本の足の肘・膝関節から下は、濃い茶。 鼻を中心とした顔の中心部分も、濃い茶色だ。

水色のクリクリとした瞳で、ビクリ顔をしている。 眉毛の先が、左右一本だけずつ、カールしている。

高杉家の大蔵省・母、政枝が、治療で通っていた近所の歯科医で、患者友達となった奥様から、授かってきた猫だ。

長女と父親<sup>じいじ</sup>は、初めてニイヤを見た瞬間から、その愛らしさにメロメロになってしまった。

……それが、去年の初夏の事だった……。

田舎町の住人は、自動車が無いと生活が大変だ。 大体の家庭が所有する家屋や土地は広く、普通自動車が、必ず2台は置けるスペースを持つ。 庭もある。

更に高杉家には、じいじが楽しみで作った、小さな畑がある。 広さは、普通自動車4、5台分、という所だろうか。

長女が母・政枝と共に手入れをしている花壇もあった。 猫の二

イヤには、住み心地の良い家庭だ。

ニイヤは一年半を経過して、中々の筋肉質な体を持った成猫へと育っている。性格は、人の手で育てられた所為か、人間の子供の様な側面がある。基本は、甘えん坊の気分屋。

ヤンチャな所は子猫の頃と変わらないが、賢い所は余り無い。

跳躍力は中々のモノだが、反射神経は、やや劣るかも知れない。

昔、高杉家に飼われていた先代猫が、ネズミやスズメを狩るのを得意とする機敏な奴だったのに比べても、彼女の獲物は、トカゲや小さな蛇など、少し動作のゆっくりした物が多い。

今日もニイヤは、せっせと畑仕事に精を出す父親じいじの、お邪魔虫となっている。

「これ、駄目だって、ダメだよ、ニイ！」

言葉とは逆に、じいじの顔は笑っている。

ニイヤは、じいじに駄目だと言われれば言われるほど、夢中になってしまう。

じいじの手が、『ちよんちよん』（草を取る時に活躍する文明の利器）で、雑草の周りの土を、軽く掘り返す。手首のスナップが利いている。その動きに合わせる様に、周りの物体も動く。

掘り返される土や、雑草の根にくっ付いている土が、じいじの手に持ち上げられ、払われて、ヘンな生き物の様に空を舞っている。

猫のニイヤの目には、その動きがスローモーションの様に、はっきりと映っている。

……当然、狙っている。『にゃ！』と、効果音がくっ付いてきそうな勢いで、猫パンチを放つ。じいじはニイヤに怪我をさせ

ない様に気をつける。『ちゃんちゃん』を振るう手の動きが、鈍くなる……。

さつきから、その繰り返しだ。じいじの作業は捗らない。  
「ダメだって、これ、ニイ！」 じいじが言う。 ニイヤには、通じる訳がない。

「また、お父さん、ニイヤに遊ばれてる」  
遅番の出勤前、長女が縁側から笑いながら、その光景を眺めていた。

じいじは一生懸命耕した畑の土に、大根の種を蒔く。  
パラパラと無造作に蒔いて水をやり、芽が出てくる一週間後を、楽しみにして目を細める。

ニイヤは、トイレに丁度良い、柔らかい地面を探している。  
じいじが作業をひと段落して、呑気にお茶を啜っている隙に、じいじの努力の跡を自分の欲求に従って、掘り返す……。『ふう』と、ほっとした顔をする。

じいじも、日当たりの良い和室で、番茶と茶菓子に舌鼓を打ちつつ、ほっとした顔をしている。 テレビ画面を見て、笑っている。

……数分後。

「やられた……」  
畑に戻ったじいじは、ニイヤの所業の跡を見つけて、参った顔で頭を掻いた。

ニイヤは、物置の屋根から距離2メートル弱の、トイレ外の小さな屋根（急な角度で、幅が狭い。素材はツルツルとしていて、滑り台の様だ）への、決死のジャンプを試みる。

障害物となる、虫や鳥が横切り飛んで行く姿が、今は無い。

うららかな日差しを指す、のどかな初冬の日。

じいじは、今日も畑で野良作業中だ。一月前に蒔いた大根の種から伸びた芽を、間抜きしている。この抜き菜は、政枝の手により、高杉一家の好物へと姿を変える。

細かく切った抜き菜を胡麻油で軽く炒め、醤油で味付けをして鰹節を塗<sup>まぶ</sup>した物を、ホカホカご飯の上に乗せて食べるのが、一家揃って大好きなのだ。

……今日は、ニイヤの邪魔が無い。作業もスムーズに進んで行く。

ニイヤは、タイミングを計っている。今日は土地独特の、季節の強風もなかった。

温かく降り注ぐ日差しに、眠気が誘われてきた。タイミングを見ているつもりが、そのまま、丸くなって日向ぼっこをしたい様な気分<sup>きぶん</sup>に襲われる。

「ニイヤ！」 政枝の声がした。「動物病院の予約があるのに、あの子は……」と、ぼやき声も後を追う。

ニイヤは、政枝の声で目を覚ました。（いけない、今日のこのチャンスを、逃しては）と、思っているのかどうかは、分からないが……。

ニイヤは眠気から完全に復活した。筋肉がピリピリと反応している。

気持ちの標準を合わせて、集中する。空気が微かに動く。ニイヤは瞬間的に、物置の屋根を蹴る！『ニヤー！』と言う、掛け声が聞こえそうだ。

約2メートルの距離を越え、ニイヤの前足はトイレ外の屋根を捉えた！……と、思った。

ツルツル！『ニヤ？！』慌てて、爪を立てる。

けれどトイレ外の屋根の質感は、ニイヤの爪を受け入れてはくれない。

カシユ、カシユ、カシユ、と、爪と屋根が戦う妙に気の抜けた様な、耳の奥をくすぐる様な軽い音が、ニイヤの耳には聞こえている。

『ニヤニヤニヤニヤ……！』ニイヤは慌てる。

しかし元々、急角度で幅も狭いトイレの屋根は、バタバタと忙しくなく動くニイヤの足を引っ掛けられる、隙間も与えてはくれない。

ズルズル、ドサ……ニイヤは尻尾から、見事に落下した。

政枝が、長女のベッドの上で丸くなっているニイヤを見付けた。

「あんた、今日はもう出してあげないよ」　急いで部屋を出て、キヤリーケースを用意した。

畑仕事に精を出すじいじに、大声で呼びかける。

「お父さん！　ニイヤを病院に連れて行くから、そろそろ仕度<sup>したく</sup>してね！」

「ああ、定期診断かあ」　じいじは作業の手を一時止めて、良く晴れた空を仰ぐ。

政枝は原付免許しかもってはいない。　ニイヤを病院へ連れて行く時は、いつも長女が、じいじに車を出してもらう。　長女は今日、仕事に出かけていた。　数年前から年金暮らしのじいじは、今日の運転手を引き受けていた。

「わかったよ」と、返事をして、じいじは呑気に立ち上がる。

ニイヤは、不機嫌だ。　さっきの落下で尻尾が痛い。　不貞寝をしていたのだ。

政枝がニイヤを連れに戻る。　抱き上げられかけて、ニイヤは反撃に出た。

『フニヤ！』　（痛いじゃないのさ！　触らないでえ！）　と、言っているのかも知れない。

「あら？　どうしたのかしら」　何時もの反撃とは様子が違う。

ニイヤの長い尻尾を、抱き上げる腕に収め様として、ニイヤが更に暴れる。

『フー！』　威嚇している。

ニイヤの爪は、手先の器用な長女が、定期的にカットしている。爪を立てられても、怪我をする心配は、それ程無い。

「しつぽ、どうかしたの？」　まあ、良い。　どうせ、定期診断に行く予定だ。　ついでに見て貰いましょうと、政枝は余り気にしないで、ニイヤをキャリーケースへ収めてしまった。

定期診断へ向かった動物病院の診察室で、獣医師は首を傾げる。  
「どうしたんでしょうねえ。　原因は分かりませんが、しつぽが、脱臼の様になってるみたいだな……」

レントゲンを見ている。　暫らくして言った。

「痛み止めだけ、注射して置きましょう。　二、三日様子を見て、まだ酷く痛がるようなら、また連れて来て下さいね」

ニイヤは、再び不機嫌になる。　ちょっと前までは、待合室で他の患畜に、キャリーケースの中から猫パンチを食らわして、少しは気分が晴れていたのに……。

さつきから痛む尻尾を、色々と弄られている。　その上、首筋にチクツと嫌なモノを当てられた。　この白い服を着た人間は、余り好きじゃない。

キャリーケースへ戻される前に、隙を伺った。　政枝が頭を下げて、自分に手を伸ばす。　体を持ち上げられる寸前、白い服の人間が、気を抜いた！

『ニヤ！』　と、掛け声がかくつ付いてきそうな勢いで、ニイヤは猫パンチを放ってやった。

……しかし。

爪が出ていない猫パンチは、獣医師には何でもない攻撃だ。　そんな事には慣れっこである。

「元気ですね。　心配は無さそうです」　白い服を着た人間は、

ニコニコしていた……。

『ウニヤア……』 低く鳴いて、負けずに威嚇しようとしているニヤヤを、政枝はあっさりと抱き上げて、キャリーケースへ収めなおしてしまった。

「全く、おてんばで大変ですよ」と、政枝は獣医師に笑って言った。

結局、ニヤヤの遊び相手 兼 ライバルは、じいじが一番良いみたいだ。

じいじの人間としての頭脳レベルと、ニヤヤの猫としての運動能力レベルは、数値的に釣り合いが取れているらしい。

その数値の釣り合いは、そこから導き出される二人（？）の行動パターンと、一致している様だ。

今日も、じいじとニヤヤは、高杉家の家庭菜園にて、低レベルな戦いを繰り広げている。

《おしまい》

**（後書き）**

お付き合い、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0641d/>

---

ニイヤ と じいじ の 呑気な日常

2010年11月29日13時48分発行